

日本とラオスの 廃棄物問題の前提の違い

日時 令和7年2月2日(日)～2月6日(木)
視察場所 ラオス
訪問先 JETRO Vientiane
LAO KAYAMA Sole Co.,Ltd
セタティラート病院
KM32最終処分場
SAVAN EMC Sole Co.,Ltd | LAO KAYAMA Sole Co.,Ltd
LAODI
VIENTIANE日本語研修センター
参加者 青年部9人

“今ここ”での課題解決のために

視察の目的

問題を先送りし続けると、より複雑でより深刻になってしまいます。それはサステナブルではなく、いつかは自分の身に降りかかります。それでも“今ここ”での課題解決を実現するためには、現地の実状に合わせた対策が必要で、日本での正論を振りかざすだけでは物事は前進しないでしょう。

協会青年部は、SDGsを考える際、避けては通れないアジアの廃棄物の現状を見るため、当会員の加山興業ならびにその現地法



人LAO KAYAMAに案内を依頼し、ラオスの廃棄物処理場や、JICAの実証事業で2020年2月に加山興業が現地に譲与した焼却炉、廃棄物由来燃料（フラフ）の製造工場などを視察しました。

具体的な廃棄物関連施設だけでなく、その国の人々の生活や経済状況などから、実現可能な対策を考えることで、地球規模の課題である資源循環の持続可能な打ち手について、視座を上げて深く学ぶ機会となりました。

相手国のニーズと自社が提供したい価値

ラオスを選んだ理由

加山興業の加山社長がラオスを選んだと言うよりは、ラオス側にニーズがあったというのが実際のところで、同社では過去にはアジアの他国にもコンサルタントなどを通して廃棄物問題の対策提案をしてきましたが、実現に至りませんでした。それは相手国のニーズと自社が提供したい価値との間にミスマッチがあったからだと考えています。

2016年に豊橋技術科学大学からインターンシップとして

Phengpaseuth氏が加山興業に来ていたこともあり、さまざまな縁で繋がったラオスに、何かできることはないかと考え2021年に現地法人LAO KAYAMAを作り、現在は廃プラスチック類をフラフにし、サイアム・セメントのラオス工場に石炭の代替燃料として販売しています。

ラオスでは2024年からはラオスに進出しているグローバル企業向けにマニフェストの運用も開始しています。グローバル企業では各国に合わせた適正処理に加え、環境負荷の低減が求められるため、直接埋立と比較して、LAO KAYAMAが選ばれることが増えてきています。

各訪問先の魅力

セタティラート病院

加山興業がJICAの事業で廃棄物分別の指導をした病院。病院名のセタティラートはラオスの偉人が由来。日本のODAで建てられ、規模としては中堅。

現在はごみ置き場の周囲にはプラ系の廃棄物が散乱しており、指導当初の分別は完全には行われていない様子でした。

KM32 最終処分

ラオスの首都ヴィエンチャンの市街地から32kmの距離にある埋立処分場。埋立処分場は当然ながら奥の方から



セタティラート病院





順番に埋め立てられていきますが、雨期になると地面が緩むため、奥まで車両が行くことができず、手前に廃棄物の山を作り始めます。そうすると奥に行くことができなくなり、奥のエリアが使えなくなってしまう。実際にその場に立ってみると、日本との前提の違いを考えさせられました。事前情報として知っていたことでも、いざ直面すると途方に暮れる広大さでした。

SAVAN EMC | LAO KAYAMA

タイ資本の収集運搬会社EMC社の拠点に、2024年にLAO KAYAMAが1軸の破碎機を導入し、フラフの製造を開始しました。

VIENTIANE 日本語研修センター

ラオス国認定の技能実習生送出期間。派遣前訓練として各企業の要望に合わせた語学訓練と職業訓練を実施しています。語学だけでなく、生活に必要なごみの分別なども指導しています。

まとめ

アジア(途上国)のごみ問題の現状

行く前にラオスで見たかったものはSDGsを考える際に

避けては通れないアジアの廃棄物の現状でしたが、実際に行くとはそれ以外の発見も大きかったです。

廃棄物の減容、無害化、適正処理には政府や国家の協力が不可欠であり、日本の常識を持ち込もうとしても前提が全く異なり通用しません。

廃棄物を適正処理した方が良いということは世界共通の認識であっても、そこに手間やコストがかかり、簡便で安価な代替案(直接埋立)があれば、実運用はそちらに流れてしまいます。

訪問した病院の裏手では、他国からの支援で導入した廃棄物処理設備が、故障したまま修理されずに放置されており、善意で始まったはずの取組の、有効性や効果に疑問を抱き、どうすれば良かったかなど、深く考えさせられました。

今回の視察は海外との比較は国内を俯瞰する際にとて役立ちました。今後も廃棄物のプロである愛知県産業資源循環協会青年部のメンバーでこうした機会を持ち、共に現実に直面し、共に学んだ経験を生かし、日本国内の廃棄物処理、資源循環の未来について、より良い方法を考えていきたいと思いました。



KM32 最終処分



SAVAN EMC | LAO KAYAMA



VIENTIANE 日本語研修センター